
どうぞごゆるりと

キリサメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうぞこゆるりと

【Nコード】

N8299C

【作者名】

キリサメ

【あらすじ】

「これは夢です」これから始まった、謎のストーリーテラー・アヤカシの紹介する様々な世界の住人たちの物語。それは哀しく、可笑しく、不思議な主人公ばかりだった。

ブログ・そこは不思議な・（前書き）

はじめまして。キリサメと申します。

これは「世にも奇妙な物語」をイメージして書きました。

誰かの作風や雰囲気にてしまう事が度々あるかもしれませんが、ですが、自分の世界を作れるように頑張りたいと思います！

更新も遅れるかもしれませんが、応援して下さいとっても嬉しいです。

読むときは、キャストや背景を思い浮かべてみてくださいねっ。

プロローグ・そこは不思議な・

「これは夢です」

それが最初の声だった。

俺は椅子に座っている。

そして目の前には「…よく分からない、何かがいる。

いや、よく分からないのは俺が混乱しているからなんだ。

小さな古びたテーブルを挟んで、俺とこいつは向かい合って座っている。

「これは夢ですから、どうか安心してください」

どこかで聞いたことのある台詞の使いまわしだ。なんだったか……
思い出せない。

俺は目を閉じた。

暗闇が広がり、そして目を開ける。

真つ白だ。俺たち以外には、誰もいない。まっしろなせかい。

「どうも、こんにちは。貴方はサクラギさんですね？」

「ああ、はい」

上司に話す時のように、俺はぺこりと頭を下げた。

俺の名前を何故知っているんだろう。

「それは、夢の中ですから、なんでもありません」

はあ…？

こいつ、何かのマンガのキャラか？

「私はアヤカシと申します」

そう言つてアヤカシも頭を下げた。

「お、お前は、何だ？夢の中の…住人？ははっ」

とりあえず笑うしかない。

アヤカシは、狐の仮面で顔を隠している、動物のようだ。

身長は……俺より小さいだろう。座っているからよく分からない。

「私は退屈している人の夢の中に出てくる者です」

すまん。

全く意味が分からない。

「簡単に申し上げましょうー貴方を退屈にさせないような話を、私がするので」

「……はあ」

頭の中で整理する。ようするに、

「現実で俺は今寝ている。で、ここは夢の中。お前は俺みたいな奴の夢の中に現れて、」

「貴方に面白い体験談、いえ、いろんな人達のストーリーを教えてください」

………それって面白いのか？

俺はいい加減にイライラとしてきた。

「貴方は、毎日毎日、只ばおつと過ごしているのではなく？」

そう、かも、しれない。

最近面白い事件も本も映画も何もねーしな。出会いも……ない。

「それだけでいいのです。私は……沢山の人々と、出会ってききました」

アヤカシは常に笑っている。

仮面の顔の口は、裂けているように笑っているからだ。

「例えば、魚が嫌いで嫌いで仕方が無い男性。私は、その男性の願いを、叶えてあげました。世界から魚を消したのです」

「ちよつと待て。お前は、願いを叶えることができるのか？」

「私は何でもできるんです」

あー、そーか。

俺は話を続けるように・と手で示した。

「最終的にその男の『世界』の……人間は、魚を食べていた動物達によって食べられるようになってしまいましたとさ」

俺は笑った。

そいつ、頭がおかしいんじゃないの？、と。

「皆、願いは何かと尋ねたら……おかしいことを言うものですよ。今から物語に登場する人達は、私が願いを叶えてあげた、滑稽な世界の住人です。」

どうですか、聞きたくありませんか？」

「んー……夢の中だしなあ………ま、聞かせてくれ………ん？」

俺はおかしな事に気づいた。

「さっき、その魚嫌いな男の『世界』って言ったよな？どうゆうことだ？」

「そのまんま、その男の『世界』です。この世は、貴方だけの世界だけだ、思っていていらつしやるのですか？」

とりあえず笑うしかない。

これは夢なんだ。何があってもおかしくないだろう。

パレルワールドって言うんだっけな……

「ま、ちよちよいと面白い話を聞かせてくれや」

「分かりました」

アヤカシがぱちんと指を鳴らすと、

テーブルには、ティーポット・ティーカップ・サンドウィッチ・クッキー等と、お茶会の道具がぱぽんと出てきた。

ほお、と俺は感心する。

「さあさあ、どうぞごゆるりと。」

お茶でもお飲みになりなさい。

退屈な貴方の心を癒すために、

不思議な世界を聞かせて魅せてあげましょう。

では、楽しいひと時を。

まずはこの人からいってみましょう」

そう言つと、

アヤカシは一人目の男の話をし始めた。

ブログ・そこは不思議な・（後書き）

一応主人公は「サクラギ」なのですが、サクラギが出てくるのはこの回と最終回のみになるかと思っています。これから載せるのは様々な世界の主人公達の話ですが、頭の隅に『これは全部アヤカシがサクラギに聞かせている物語なんだな』と置いておいて下さいねっ。

では、これから宜しくお願いします！

嘘が嫌いな男・前編（前書き）

結構時間をかけて作った作品です。

この物語の主人公も、アヤカシに関わってしまった一人となります。
では、どうぞ。

嘘が嫌いな男・前編

ぴっちゃんぴっちゃん。

台所から、水が垂れる音がする。

きっと蛇口がちゃんと閉められていないんだろうな。そう思うだけ。何もしない。

俺はもう何日も、ずっとこうして寝転んでいる。

もう疲れたよ。

また寝るとしよう。寝ているときだけ、忘れられる。

真っ黒なせかい。

俺だけが居て、まわりはただ暗闇があるばかり。

「これは夢です」

「……………んっ!？」

ぼおつと目の前に、赤い霧が出てきた。

赤い霧が晴れると―そこにはにっこり顔。

狐の仮面。目は上にきゅっと釣り上がっていて、口は耳まで裂けている。

あまりの可笑しさに、俺は尻餅をついてしまった。

「おやおや、すみません、驚かせてしまいましたか」

すつと手を差し出してきた。動物のような、さらさらとした毛が生えた手を、俺は掴んで何とか立ち上がる。

「私、アヤカシと申します。率直に言いますと……………夢を叶える操れる何でもできる、者です」

整理するのに時間がかかった。

何?アヤカシ?夢を叶えるあやつれる…?

「なので今、こうして貴方の夢の中に居ます」
な、るほど。……。

分かったようで分かっていない頭を、こくりと頷けた。
「で、貴方、絶望でもしてるのですか？」

「へ？」

間拔けた声が出てしまった。

絶望、か。そうかもしれないな。

「凶星ですね。そんな貴方に――」

アヤカシはくるりと回って、俺に指をびしりと向けた。

「願い事を一つ、叶えてあげましょう」

「……本当か！？」

つい声を荒げてしまったね。

たった3分前、寝る前にふと願った事があつたからだろうな。

「ええ。何でもいいですよ。モノをあげるだけではなく、『世界を
ねじまげる』こともできます。世界平和、とかね――」

俺はうんうんと唸った。

どうせ夢、されど夢。どうせなら何か言っておこうではないか。
俺はうんうんと唸った。

ひらめく。

「……嘘」

「『嘘』？」

アヤカシは不思議そうに尋ねてきた。にんまり顔はもちろん変わら
ないままだが。

「この世から、嘘を消してくれ！」

叫びにも近い声でアヤカシに頼んだ。
そうだ。

嘘だ。あの嘘つき野郎の嘘のせいで、俺は――。

「ほほう……貴方、仲の良い友人さんに裏切られたみたいですねえ。
おっ、保証人……」

「黙れッ！」

アヤカシはクスクスと笑っている。

俺は胸がむかむかとしてきた。

アイツガワルインダ。アイツガ俺二嘘ヲツイタノダ。

「嘘というものは人の脳から生まれるもの。完全に消すことはできません……ですが」

再び、びしりと指を向けるアヤカシ。

「『嘘をつけない社会』にしてしましましょう！」

うそをつけない社会……？

俺は意味が分からなかったが、

「要するに、前のように易々と嘘をつかれることはないんだな？」

「はい、そうです」

心がじんわりとしてきた。

嘘が……消える。少しでも。

「最後に……本当に、いいんですか？」

この世には嘘が蔓延している。そのせいで、騙される人間が出てくる。

そんなもの、なくなっただけいい。

所詮、嘘なんて、その場しのぎのモノなんだ。自分のために嘘をついてくれる、というのも全く必要なんか無い。

嘘は無くなったほうがイインダ。

「ああ、頼む」

俺は踵を返した。

「……分かりました。では、今から貴方は目が覚めます。そしたら……世界が変わっている事に気づくでしょう」

そう言っつて、アヤカシはにんまりと笑った、と思う。

仮面の下も、きっと今笑っているに違いない。

俺は目を見てぞっとした。

くりぬかれた細いつり目の向こうから……赤黒い光が、見えた。

それがその夢の中で見た最後のモノで、

俺は暗闇に包まれた。

*
つ
づ
く

嘘が嫌いな男・前編（後書き）

次へ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8299c/>

どうぞごゆるりと

2010年10月28日07時13分発行